文化的テラスのシンボリズム

ライヒ・ダヴィド*

1．はじめに

「文化的テラス」というのは、傾斜のある土地から平坦な農業地域を得ることによって、土壌浸食を防止し、接地水分を維持するために、人によって作られたレリーフのことである。文化的テラスでは、農作物が生産されているので、耕作テラスとも言われる。天然の河岸段丘と区別できるように、“人工”という言葉が使われることもある。文化的テラスが景観の大部分をカバーする場合は、文化的景観と呼ばれる。

前世紀には、地方において文化的景観が歴史的に変化した。その変化の原因は、主に農耕社会から現代のグローバル経済社会への移行である。この移行によって、文化的景観の機能や外観だけでなく、人々の考え方やライフスタイルも変わった。そして第二次世界大戦後は急速な工業化にともない、機能が地方から都市へ移行し、都市は拡張し、地方の農業は衰退した。その結果、文化的景観はいくつかのプロセスで影響を受けるようになった。特に農業の放棄や植林、農業再編、都市化等のプロセスである。文化的テラスは文化的景観の一部として、同じようなプロセスで変化していった。

独特の外観を持つ文化的テラスは、特にアジアのモンスーン諸国やアラビア半島、アンデス、地中海にもある。本論文では、距離の離れた、スロベニアと日本の文化的テラスを取り上げて、調査する。

＊リュブリャナ大学大学院院生

本論文の目的は、両国の文化的テラスの類似点と相違点を明らかにするとともに、以下の点について考察することである。

- 自然と人間が文化的テラスの発達にどのような影響を与えてきたかを調べる。
- 文化的テラスが変化する原因と結果、および文化的景観への影響を示す。
- 文化的テラスの象徴的価値を評価する。
- 現地調査で、文化的テラスの現代の問題や発達の機会を分析する。
- 将来文化的テラスを維持するために可能な解決策を提示する。

分析は次の方法で行った。

- 専門文献とビデオの分析
- スロベニアでの現地調査
- 日本での現地調査
- 専門家へのインタビュー

2．スロベニアの文化的テラス

スロベニアは文化的テラスが多い国だと言われる。自然・社会的条件の違いで、地域間でテラス間の特徴が大幅に異なっているだけでなく、それぞれの歴史的経緯が反映されている。スロベニアのほとんどの文化的テラスは古くて伝統的なタイプで、その他のテラスは特に20世紀に作られた近代的なテラスのタイプである。よって、スロベニアの文化的テラスは古くて伝統的な手作りのテラスと、現代的で機械で作られたテラスに分けることが出来る。前者のテラスの場合は、遠隔地域や

テラス棚の狭さ、労働力不足で、テラスが放棄されることが多い。後者の現代的なテラスは機械で作られており、主にワインの生産に使用されている。

現地調査を行った地域（コペルスコ・プリモリエ、ゴリシュカ・ブルダ、ハロゼ）では、テラスが現代的なタイプでは、現在でも十分利用されていた。コペルスコ・プリモリエでは、様々なテラスのタイプが見られる。ワインのテラスやガーデニングのテラス、オリーブのテラスなどである。典型的な例はブリッチという地域である。そこでは、伝統的なスタイルで建てられているテラスを利用し、高品質のワインが生産されている。ゴリシュカ・ブルダでは、大昔からワインを生産し、文化的テラスが数多くあるため、冒頭で述べたようにそれは文化的景観とも言える。その結果、ゴリシュカ・ブルダの文化的景観はスロベニアで最も魅力がある地域として評価されている。最後に、ハロゼのテラスでもワイン生産が盛んである。ハロゼではワイン生産によって観光を興すとともに文化遺産を保存するために、イエルザレムという町を文化公園として宣言した。

３．日本の文化的テラス

日本の文化的テラスは棚田と呼ばれている。しばしば、段々畑という言葉も使われている。日本の棚田は、全体的に地理的条件が芳しくなく、山にあるレリーフの形態だが、海面まで近づいている棚田もある。棚田では、主に米が生産されている。しかし、野菜や、大豆、蕎麦、うなぎ、虹鱒などが生産されている棚田もある。

日本では次の六つの棚田タイプがある。

・土坡の棚田
・石積みの棚田
・緩斜地の棚田
・急斜地の棚田
・海辺の棚田
・整然とした棚田

日本の農村は、出生率の低下と高齢化に脅かされている。放棄された農地が増加し、牧歌的な文化的景観が消えてしまいつつある。しかし、近年では、農業を復興し、農業の機能を回復するための運動が盛んになっている。自然環境や人的資源の活用で、地方の一部が完全に回復するまでになった。また、棚田を保存するために、様々な組織が確立された。特に有名なのが「棚田ネットワーク」というNPO団体である。「棚田ネットワーク」の活動のなかには米の栽培に関する学校活動やウエブサイトやポータルを通して情報を伝達したり、都市と地方の間の協力を維持したりすることなどが含まれている。その結果、www.tanada.or.jp、や www.danbata.jp、www.tanadagakkai.com のようなネットポータルが出てきた。棚田を守るため、様々なNPO団体がフォーラムやフォトコンテストや旅行を行い、農業の復興のために様々な活動をしている。

日本の特徴は、棚田のオーナーシステムである。オーナーシステムというのは、棚田の所有者とテナント（ほとんどのテナントが米の生産を希望する都市の人）を会わせるシステムである。このシステムは、所有者やテナント同士だけでなく、所有者とテナントの間でも意見や経験を交換させることで、テラスの保全を推進するのに役立っている。

４．考察

どの程度まで私たちは文化的景観を維持することが出来るだろうか。私たちが行ってきた農業の近代的開発は、自然を変化させ、自然の多様性の低下、均質性や自然のありのままの能力への依存の低下の原因になる。一方、農業の放棄も、文化や建築遺産が衰退し、最終的に文化的景観が消失する原因のひとつではないだろうか。従って、文化的背景の維持のために、次の三つの要因をあげ

ることができる。

・無関心原則

・保護原則

・調和的な発達のモデル

まず無関心原則というのは、「何もしない」という原則である。すなわち自然に起こることを、自然に起こさせるということである。次に保護原則というのは、経済成長を超えて、文化的景観を文化公園などで出来るだけ保護することである。最後に、調和的な発達のモデルは、オーナーシステムのように、生物多様性、生態系の健全性と文化遺産を考慮し、景観を復元するモデルである。

5．まとめ

この調査の結果、スロベニアと日本の文化的テラスはそれぞれの相違点と類似点があるということが分かった。最初に、相違点を述べると、それぞれのテラスで生産されているものが異なる。スロベニアのテラスではワイン、果物やオリーブが生産されている。日本では特に米の生産が行われているが、小麦、蕎麦やうなぎなどを生産している棚田もあると言われる。スロベニアの棚田の保存のし方も日本の方法と異なっている。前者のスロベニアでは、無関心原則を通じて、自然に起こさせることが多いが、文化公園や文化遺産として保護されているテラスが少ない。個人が努力して、棚田を守ろうとする場合が多い。一方、日本では最近、調和的な発展のモデル、つまり棚田のオーナーシステムが使われているようになってきた。都市と地方の協力のおかげで、ある棚田は完全に守れるようになったそうである。しかし、まだ保存されていない場合も多い。

両国間には類似点もある。棚田やワインなどのテラスは、人々に大きな影響を与えて、文化的景観の中で大切な役割を持っている。両国とも、文化的テラスが大事で守る必要があるという意識は少ないようであるが、最近、保存のための運動や活動が増加しつつあると言われている。しかし、将来どうなるは分からないということである。もう一つの両国間の共通点は、両国とも文化的テラスが保存できるように、大変な努力が必要だということである。

農業の放棄や農業の社会における機能の変化や、過疎化などは文化的テラス、そして文化的景観にとっては大きな問題である。その結果、あまりにも多くのテラスが既に衰退、または衰退の危機に瀕している。文化的テラスは、生物の多様性において多くの動物や植物にとって重要な生息地であり、ユニークな生態系を保つ要因にもなっている。適切に保存されたテラスが、接地水分を維持し、地すべりを防いでいる景観は、文化遺産としても、観光という観点でも興味深い。農地としても、文化的テラスは小麦、野菜や果物の生産を可能にするので、国はこれを文化的景観や文化遺産として保存するべきである。

文化的テラスの保存のためには、様々な解決策があるが、なによりも最初に人間間のつながりをより強化し、棚田を守らなければならないという意識を広げることが大切だと考える。その上で運動や活動などの努力が必要であろう。そうすれば、歴史的な文化的テラスを後世に引き継いでいくことができるだろう。

参考文献

・Ažman Momirski, L., Kladnik, D., 2009. Terasirane pokrajine v Sloveniji. Acta geographica Slovenica, 49, 1, p. 7-37.

・Ažman Momirski, L., Kladnik, D., Komac, B., Petek, F., Repolusk, P., Zorn, M., 2008. Terasirana pokrajina Goriških brd. Ljubljana, Založba ZRC, ZRC SAZU, 197 p.

・Bevan, A., Conolly, J., 2011. Terraced fields and Mediterranean landscape structure. An analytical case study from Antikythera, Greece. Ecological Modelling, 222, p. 1303-1314.

・Harada, C., Kobayashi, K., 2010. Conservation of rice terraces in Japan – roles of the Sakaori rice terrace conservation association. Journal for Geography, 5, 1, p.

91-100.
・石井 里津子，1999．棚田はエライ．農山漁村文化協会，118 p.
・Križaj Smrdel, H., 2010. Kulturne terase v Slovenskih pokrajinah. Dela 34, 2010, p. 39-60.
・Perpar, A., 2006. Japonsko podeželje. Geografski obzornik, 53, 3, p. 24-27.
・Titl, J., 1965. Socialnogeografski problemi na koprskem podeželju. Koper, Lipa, 156 p.
・Urbanc, M., 2002. Kulturne pokrajine v Sloveniji. Ljubljana, Založba ZRC, ZRC SAZU, 224 p.